

令和2年度 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会（高校専門学科）第2回 議事録（案）

日時	令和2年12月18日（金）13:00～15:00
場所	Zoom 会議室
委員	宍戸 学 日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【総括座長】 大日方 樹 岩倉高等学校 教諭 北村 由美 金沢商業高等学校 教諭 鈴鹿 剛 徳島県立徳島商業高等学校 教諭 (氏名五十音順・敬称略)
オブザーバー	中谷知記 北海道ニセコ高等学校 教諭

1. 開会・挨拶

○事務局・MURC 平川

第2回分科会（高校専門学科）を開催させていただきます。

開会に先立ちまして、官公庁の刀根様、ご挨拶をお願いします。

○観光庁・刀根

皆様、本日はお忙しい中ありがとうございます。前回のミーティングでは、小中、高校の普通科、専門学科全て企画していただいていたのですが、専門学科は地域の課題にすごく密着しているということをひしひしと感じました。

今日も引き続き、資質・能力や求められるプログラムに議論が移っていくのですが、是非皆様の高校での具体的な取り組みやその中で感じる課題や思いについて、自由にご議論いただければと思います。

本日もよろしくをお願いします。

2. 討議事項に関する説明

○MURC・平川

資料2を説明

3. 意見交換

<オブザーバー紹介>

○日本大学・宍戸委員

今日の次第ではオブザーバー紹介は5分となっていますが、10分程、時間を取らせていただきます。鈴木校長がご欠席ですが、前回にご参加いただいています。本日は、ニセコ高校の中谷先

生にご出席いただいております。先日も、観光サミットを開催していただき、高校の研究会を長く務められていて、そのあたりのお話を少ししていただいているから、本題である3つのテーマについて、議論をしていきたいと思っています。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

ニセコ高校の中谷と申します。北海道はもう1mぐらい雪が降っており、最近は、ワーケーションという言葉もあるのですが、スキー場まで20分ということで、まさに自分が今そのような状況なのではないかと思っています。教科は商業を教えています。よろしくお願いします。

ニセコ高校は、ニセコ町立で、ニセコ町が運営している学校ですので、ニセコ町の説明をさせていただきます。5,000人弱の人口に対し、年間170万人の観光客が訪れる観光国際都市です。また、環境モデル都市、SDGs未来都市に選定されていて、持続可能なまちづくりの実践をしています。ニセコ高校もそのような形で教育活動を行っています。

ニセコ高校は、ニセコ町立の農業高校です。農業高校ではありますが、地域の観光産業を支える人材育成を目的に、2年次より、農業と観光というコースに分かれます。観光は、観光リゾートコースという名前で観光を専攻して勉強をする形となります。来年度から、観光リゾートコースがグローバル観光コースに改名されます。その狙いとしては、英語力の向上、異文化理解、観光の知識や技能を身に着けたグローバル人材を育成していこうということで、取組んでいきたいと考えています。私は観光コースを6年間担当しておりまして、その6年間の間に、外資系の企業やホテルがたくさん進出してきて、目まぐるしく変化している地域です。インターンシップ先の資本が変わったり、国が変わったりすることなどにも対応しながら進めています。

マレーシアに本社があり、ニセコ町でヒルトンホテルを運営しているYTLグループと提携して、マレーシアへの見学旅行や、マレーシアから来日している実習生との異文化交流、国際的な素養、英語力の実践を行っています。もう1つ特徴的なところは、定時制は夜のイメージがあるのですが、昼間定時制をとっています。特徴としては、3年生で卒業する生徒もいますが、4年生に進むことができます。99%は卒業しますが、毎年1~2名、4年生に進級します。4年生のプログラムとしては、6ヶ月のマレーシアでのホテル研修を実施しております。ここは、YTLの協力を得て、5つ星ホテルでのサービスマインドを学んだり、他民族国家ならではの集会や文化、人との関わりを身に着ける実習をしています。

ニセコ町は、国際的で豊かなところなので、そのフィールドを使って、インバウンドを意識した国際イベントの企画や英語科教員とYTLが組んだ授業など、特色のある授業を行っています。

次に、今年、本校が行った全国高等学校観光教育研究会について、報告させていただきます。

本来であれば、今年度、北海道ニセコ町で観光教育研究会を行うはずだったのですが、コロナ禍の影響で、8月の教員研修、12月の生徒講義に関しては、全てオンラインで行いました。

研究会は、今年8/8に実施しました。本校は当番校ですが、事務局は宮城県の松島高校です。この研究会の今年の会員校は22校、個人会員は7名です。8月に実施した全国高等学校観光教育研究会につきましては、「地域社会とともにつくる観光教育のあり方」という形で、18校40名の先生にご参加いただきました。本日もご参加の先生方にもご参加いただき、非常に盛り上がったと思っています。この後、「地域に根差した観光の展望とコロナ禍の教育活動について」ということで、宍戸先生にも講演をいただき、それを元に、いくつかのグループに分かれてディスカッションを行いました。

休暇明けだったので、休暇中に何をしていたのか、どのようなアプローチで観光教育をしていたのか、フィールドワークが無くなってしまったので、どう補っていかうとか、色んな議論をして、非常に面白い有意義な時間を過ごすことができました。

本大会につきましては、本協議会が主催という形と、宍戸先生が副会長を務める日本観光協議学会に後援をいただきながら行いました。フランクな感じで行った結果、学科や教科の垣根を越えて、誰もがこれまで経験していないことや、観光教育の話ができたと思います。

事前に行った研究会の事項については話し合うことができなかったのですが、共有するというで紹介させていただきました。例えば、本大会は、交通の便がいいところでやった方がいいのではないか、観光教育における教材や資料不足といったことがあるとか、教科横断的な学びでどうしようとか、観光庁とのミーティング機会を設けるとか、校内連携とか、色々な意見が出されました。また、本大会の運営方法についても、今後どうしようかという意見が出されました。

出された意見については、事務局である松島高校を中心に、まだ話し合う機会が設けられていないのが課題だと感じています。

12/12には、観光サミットを行いました。これも本来であれば北海道の札幌国際大学で行う予定だったのですが、こちらでもオンラインで行いました。テーマとしては「コロナ禍の地域を活性化させるための観光の在り方」ということで、全国から9校参加していただきました。初めに、日本航空の方から、ふるさとアンバサダーの話、地域を活性化させる活動や、CAの方が地上に降りて地域の魅力を再発見しているという話をしてもらった後に、3つのグループにわかれてディスカッションを行い、政策提案をしました。なかなか、観光を学ぶ仲間が集まる機会がありませんので、非常に生徒たちも盛り上がり、いいディスカッションができたと感じています。

たくさんのアイデアが出され、これからの観光教育の可能性を非常に感じることができました。

今年度、当番校として感じたことは、本来であれば皆様に北海道に来ていただきたかったのですが、オンラインでの開催となり、非常に残念ではありますが、このようなスタイルでミーティングができたことで、今後、このような形で生徒交流ができるのではないかなと感じました。

課題としましては、本協議会については、色々な教科の先生方が参加できるメリットがあると感じています。例えば、商業、社会、英語といった教科の垣根を越えて、色々な情報交換ができると感じています。今後、大会を開催する時に、1つの教科の部会が入ってしまうと、他の教科の先生が入りづらくなってしまったりとか、他の教科の先生に連絡がいなくなってしまうとか、そういう問題も出てくるのではないかと感じています。

今後、教科や高校だけという括りだけではなく、大学や観光関連企業、団体も参加できるような研究会にできることが望ましいと感じています。

○日本大学・宍戸委員

中谷先生ありがとうございました。限られた時間の中で、色々な情報をありがとうございました。

せっかくこういったプラットフォームが長く続いているのですが、まじめにコツコツとやってきている関係で、あまり知っていただく機会もなく、現場の先生方のご苦勞の元に成り立っていますので、こういった組織にうまく絡んでいただくことができないかと思っているところでもございます。

今日の次第は3つあります。①の観光教育の「意義・目的」では、資料p7に、昨年度の事業も

踏まえた中で、今年度の議論も踏まえて、いくつか加筆をしていく中で、学習対象としての観光教育の意識と、ツールとしての意識が少し整理されてきました。大きな目的としては、観光を通して豊かに生きる力を育み、持続可能な地域社会を作ることを目指す教育ということで、前回、小学校が先にスタートしましたので、この議論が深まってきたところです。

前回の分科会でもお話が出ましたが、まずはこれについて、少しご意見をうかがいたいと思います。

私たちは専門学科です。ということで、少し先んじてしまうのですが、資質・能力も絡んでくる気がします。そうした中で、最後にお話があった観光教育の資質・能力のところですが、小学校、中学校、高校+専門教育ということで、枠組みを作っています。これは、鈴鹿先生が、未来会議などから出された学齢に合わせた観光教育の発展段階やイメージが、最終的にこの協議会の示す1つの大きな役割ではないかということがあり、これについては皆さん意義がないところだと思います。

それに合わせて、小中高を区切っていき、高校は普通科と専門学科の2つの大きな軸があって、少し別の視点が必要だということで、そもそもこれでいいのかということがあります。

小学校は普通教育で終わって、中学校が始まるわけではなく、小中で続いていくんだよねという話があり、高校についてもずっとつながって行って、専門学科でやる専門教育が、就職する人間だけに効果があるかという、全然別の進学先を選ぶ生徒もいます。

観光教育は専門教育なので、学んだらその就職先に行くのが正解だとか、行かなければ意味がない、だから専門教育は必要ないという議論になりがちですが、私はそうは思わないので、そういうこともあって、この図をらせん状に書いてみてはどうかという提案もございました。

このあたりを踏まえたうえで、専門学科のスタンスでご意見をうかがえればと思っています。

①観光教育の「意義・目的」について

○金沢商業高等学校・北村委員

前回の議論を踏まえながら、観光教育の目的が何だろうと考えた時に、基本となる土台（地域を知る、地域の課題を知る）を作りながら、行動しながら、それが成功するのか失敗するのか、経験を積みながら、日々実践的に繰り返し行って、基本的な土台を作ってから、今度は逆に地域を離れて外から内を見るといったこと、例えば他県に行って自分の住んでいる地域を見るとか、海外に行ってそこから日本を見るといった形で、生きる力や経験値を最終的には身に付けていけたらと思いました。

○日本大学・宍戸委員

ありがとうございました。先日、小学校でも話が出たのですが、小学校の場合、どうしても行動範囲が狭かったり、地域に対する目線は、旅行することで、初めて地域への目線が見えてくるよねという話も出ていました。基本は、小学校、中学校、高校もそんなに変わらないところもあったように感じました。

金沢商業では、観光を専攻している生徒としていない生徒で意識の違いはありますか。また、基本的にそれは観光教育をやらないと育めないのかといった時に、普通の商業教育でも色んな地域活動をしているので、別にやらなくてもいいという話にもなると思いますよね。

先生として、両方を見ていてそのあたり何かありますか。

○金沢商業高等学校・北村委員

本校でも割合として多いのは、ビジネスコースで、簿記や情報処理を学ぶ子たちがウエイトを占めています。その子たちは、言ったことはきちんとできて、ここまでやりなさいということはやってくるのですが、そこからちょっと外れたことを聞いて、これについて考えを述べなさいと言った時に、なかなかそれが出てこないんですね。受け身の感じで待っていることが多いように感じます。

一方、観光の生徒たちは、自分から何かを探してつかみ取ろうとしていることが多いです。

進路に関しても、ビジネスコースの子たちとは違う進路を選んでいて、来年から1年留学に行きたいという生徒もいます。観光コースの子たちは、2年生で10人ぐらいしかいないのですが、そのうち2人が1年間留学に行きたいと言っています。

多分、いろんなことを観光の授業では考えなさいと求められることが多くあり、それに照らしあわせて自分のことをつなげて、将来のことを考えるのか、随分そのあたりが違う感覚があります。進路に関しては全然違います。

○日本大学・宍戸委員

小学校の分科会でも話が出ていましたが、パーッと視界が開けるといった、そういう部分なんでしょうね。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

自校の場合、特にグローバルという部分でいうと、3つに分かれます。現地に行った生徒、現地から来た外国人の方々に対応した生徒、何も触らなかった生徒というように分かれます。外国に1回でも行った生徒は、再度行きたいという子がほぼ100%です。同じ国に行きたいという生徒もいれば、違う国に行ってみいたいという子もいるのですが、大学に進学するにしても、特徴的なのは、第2志望のところに、海外の大学の名前があったり、第1志望の大学に行ったとしても短期留学してみたいという意見がすごく増えます。

外国人に関わった生徒は、同じように仲間になれるのだということは理解してくれて、海外に行きたいか行きたくないかはそれぞれですが、海外と何か関わるような仕事に対してのアレルギー反応はかなり減ります。

何も触らなかった生徒は2つに分かれて、興味津々で寄っていつてみようとする子たちと、遠巻きに私とは違う世界だと見ている子に分かれますので、生徒の変化はすごく出てくると感じています。

海外に行った子は、日本や徳島の良さをもう一度見ている子がすごく多くて、一回は外に出て色々やりたいけど、また帰ってきたいとなる子も多くなっているのは事実だと思います。そこも含めて、観光教育の中で、郷土愛を育むといったことも1つの大きな目的になってくるかなと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

現実を伝えることも大事だと思います。先ほどのお話の中でも、地域の問題点の話もあるのですが、例えば、観光の教育をやっている学校は、地方の学校が多いと思いますので、地元の問題

点を知ることから始まり、別の場所の問題点を考えてみる、それは学校間交流とかそういう形で、現地に行ったりとか、話をしてみたりということから、問題点を知り、それぞれがお互いの問題点を提起することにより、新たな問題点や改善点を知り、新たな知識や交流が生まれていく、そこで社会との関わりというところが出てくると思います。

また役職のある方と交流をしたり、話を聞くことから、様々な学びが出てくると思います。小学校や中学校や高校それぞれで観光教育を行うというところもあり、これはその後の資質や能力につながっていくのかもしれませんが、中学校で観光を学んだ子たちが、小学校に出向いて観光の事について、小学生と話をしたり、プログラムを一緒にやったり、今度は、中学生に対して高校生たちが交流をする、そういう中で観光を観光学として学んでいき、様々な分野に広がっていくと思います。

先ほどの中谷先生のお話にもありましたが、その中で、色んな教科において、観光の学びで使えるものをピックアップして、それをプログラム化していくことによって、新たな社会との関わりにつながっていければと考えています。

○日本大学・宍戸委員

色々ご示唆に富むお話をいただき、2つフィットしたことがあります。

観光について役職にある方とお話をするということ、結局、観光教育というのは、外の世界や大人との触れ合いが可能なので（勿論先生のやり方にもよりますが）、外と繋がるということはおっしゃる通りだと思います。

また、中学生、高校生の上級学年が下の学年にお話しをしていくということは、小学校の分科会でも話が出ていて、そういうアプローチは今後期待したいということで、おそらく、すべての学校を通じて出ていたことだと思います。

○観光庁・刀根

前回、大日方先生のお話で、観光庁内で議論になったことがあります。運賃計算をすることで、生徒たちがもっと観光に興味を持つという話があったかと思うのですが、日常生活だと、我々も運賃はネットで計算して出てくるものなので、それを教育でわざわざやるということに対して、子どもがどんな風に興味を持っていくのかが知りたいのですが。

○岩倉高等学校・大日方委員

本来、運賃表というのは決まっているわけなのですが、これに対してちゃんと、旅客営業規則というルールがあり、簡単に自分たちで決められるわけではありません。

よくあるのは、その区間を運転すると、北海道だといくら赤字になるということがニュースになって出てくると思います。また、例えばJRでも、北海道と四国と九州では運賃が違いますし、この地方でも幹線と地方路線の2つに分かれており、なぜ地方路線の金額が高いのかということもあります。普通に、運賃計算をするだけでは、そのあたり出てこないのですが、ある意味、複雑化している中で、興味を持ってもらう。また、なぜ、高くしなければいけないのか、というところが、利用率だったり、過疎化の問題だったり、廃線の危機にさらされている路線もたくさんありますので、そのあたりから地域の課題につなげられればと思っています。

そもそも、検索するだけではなく、ルールがあるということ、1つ知ることが必要だと思います。

ます。また飛行機も運賃は決まっていますが、Go to やパックもあって、運賃があってもないようなものになっているし、バスも貸し切りバスの運賃は決まっていますので、まず、そういう基本的なことを知るといことが、知識として必要なのではないかと思います。

○観光庁・刀根

ありがとうございました。よく分かりました。それが地域の課題につながっていくのですね。

○日本大学・宋戸委員

今の問題はもしかすると、ちょっと広がってしまう話にはなりますが、例えば商業高校だと簿記検定や情報処理など、技術的な検定試験が結構多いのですよね。当然、それが仕事に役立つということもあるのですが、簿記なんかも例えば、貸借対照表とか損益計算書とか、お金の移動が見える形で出てくるわけなので、そういう専門教育は、水産は水産で、農業は農業であると思います。

消費者として暮らしていると、見えなくていいところがあって、スーパーに行くとき魚は切り身で出てきて、あのまま泳いでいるわけではないという笑い話があるように、観光教育については、観光産業としての仕組みとして考えた時に、そういう話もあるということではないかと思います。

もう1つは旅行業取扱管理者試験というものがあるので、その試験の中に運賃の計算があるので、場合によっては、何も考えずにやれということも、学校によってはあるかもしれません。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

ニセコ町に来たことがある方もいらっしゃると思うのですが、非常に特色ある街で、外国人が人口の8%を占めています。

旅や観光について考えることが非常に多く、自校の生徒に関しては、そんなに学力が高いわけではなく、英語ができるわけでもないが、やたら外国に行きたがる生徒が多いです。なぜかと考えると、小さい頃から外国の方に接することが多く、クラスにもハーフの子がたくさんいるので、喋れなくてもコミュニケーションが取れる免疫ができている子が多いと感じています。

その子に関しては、言語が通じる、色んな文化があるということを知ると、卒業後に海外の進路を選ぶ子も多いです。本校の修学旅行がマレーシアだったり、海外からも非常に人が来ていただいている、英語が喋れなくても、無理やりコミュニケーションを取らせたりしているので、卒業後の進路に海外を選択することが非常に多いです。

小さい頃から、環境にどう置くべきか、色んな考え方、文化風習が違う人たちと触れ合うことによって、大人になった時に、そこに興味を持って、旅に行ったり、地域の良さを感じたりということにつながっていくと思います。

ニセコ町だと、夏休みに入ると、小中学校では1ヶ月休みを取って旅行に行かれる方が非常に多いので、そういうことが、自然に観光に興味を持ったり、アジアへ行った時に、将来、この人たちの役に立ちたい、仕事につきたいということや、ニセコ町への観光客もたくさんいるので、ちょっとした感情をどう解決していかうかというところに照らし合わせたり、小中学生で旅行に行っていてそういうことを学んでくる生徒が非常に多いように思います。

高校になると、ニセコ町の子は、なかなかニセコ高校に進学しないので難しいのですが、小中の時の国際的な感覚が、観光に興味を持って自分で学んだり、それをスキルにして国際的な問題

に取り組んでいこうということで大学を選択したりすることはあるのではないかと感じました。

○日本大学・宍戸委員

ニセコ高校にはハーフのお子さんが多いのですか。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

いえ、ハーフのおさんは、札幌のインターに行ったり、違う学校に行くことが多いです。うちは農業高校なので行けないというのが、地域課題の1つだと思っています。来年から、グローバル観光コースになるのですが、その国際化も課題の1つです。

○日本大学・宍戸委員

少し勘違いしていました。小中は外国人もたくさんいるし、そこで日本人と外国人が結婚することも増え、ハーフの子がいるのだらうと思うのですが、そういう子たちは、ニセコ高校を選ばずに出ていってしまうことが多いということですね。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

はい。そのパターンの方が多いです。

○日本大学・宍戸委員

昔とは全然違う町の雰囲気、小中高の教育も変わってきたのかなという感じがします。ありがとうございました。

平川さん、発言は一巡しましたが、ここにどこまで入れるかによって、何でもありになってしまうので悩ましいのですが、今の話は比較的、前回小学校でも出た、外に非常に目が開かれていくという話があって、そのあたりはどうでしょうか。今は見当たらない気がするのですが。外に目が向いてくとか、グローバルな視点を持つなど、そういう部分がない気がします。

○MURC・平川

前は、課題解決の時に、もっと視野がパッと開けるといったところの話があったのですが、今のお話を聞くと、2つ目のライフデザインのところで、今、観光に携わることで、主体性とか自己肯定感ということを書いてあるのですが、ここに、外国の方や、属性の異なる方にどんどん関わることを厭わないというか、そういう単語をここに、もう1つ追加しても、もしかしたらいいのかもしれないと感じました。

○日本大学・宍戸委員

なんとなく、たくましくなっていくこともあるんですね。それが今の外に目が向いてくという意味合いですね。すぐにはいい言葉が思いつかないのですが。

今、お話をうかがって感じたのは、やはり観光教育が持っている、専門的な実務的なレベルアップが専門学科としては一番大事だと思っていますが、本質的な教育の価値としては、小学校、中学校、高校の普通科も含めて、共通する目的は、前提として共有できると思います。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

これは、基本的に、教える側の立場の目的ですよね。最終的にまとめる段階のときに、小中高の段階での、子どもたち目線の、本人の感覚で、これができるようになるという一言が何かあると分かりやすいと思うのですが。

○日本大学・宍戸委員

今回はもちろん、先生方を中心に、いかにこれを普及するかといった時に、つい我々は教える側のことしか考えていなくなるのですが、中谷先生の発表の中でも、高校の先生方が研究会をやっていく中で、先生たちだけだと物足りなさが出てくるので、やはり、生徒をどう巻き込んで、生徒がどう活躍する場を作るかという議論があって、観光サミットが生まれたのだと思います。

小中高までの関係者、もしくは、教育に熱心な大学の関係者はその中で、生徒や児童や学生は何を学べるのか、大学でもシラバスを書くときには、教育目線で書くとダメで、学生が何をできるようになるのかが非常に意識されているので、ここに入れるということではなくて、そういう目線みたいなものや、メッセージみたいなものが意識されるように、何か別のフレームであってもしいのかもしれないですね

②観光教育で育む「資質・能力」について

○日本大学・宍戸委員

先ほどの議論は、小中高、普遍的な、まさに小学校の部会から出てきた、螺旋的に描いていくような観光教育、これが小学校、中学校から大人に向かっていく中で、広く認識され、価値があるだろうという話でした。

一方、我々は専門学科として、プラス専門教育という形に今は位置づけられていますが、商業では観光ビジネスという科目が立ち上がっていて、これをいかに実効性があるものにするか、意義あるものにするかということが、商業教育の中では大きなテーマです。また前は、水産や福祉など、幅広い専門学科との関係性といった話も出ていました。

これがちょっとひっかかかっていて、これだと、小中高+専門教育ということで、描き方も分かりづらいので、そのあたりが課題の1つだと思っています。

この図を眺めながら、改めて専門学科ということ念頭に置いて、課題解決の力とライフデザインの力というものがこの枠組みとしてあるので、単純に対比にするのか、吸収するののかは別にしてお話いただければと思います。

○金沢商業高等学校・北村委員

普通高校と専門高校との違いを考えてみた時に、普通高校だと、観光を広くとらえた場合に、商品開発とかガイドはできるかもしれませんが、自分で何かを作り出して実践することはなかなか時間的に難しいと思います。市役所や地域の方に、これを一緒にやろうと枠組みができている範囲であれば、普通高校はそこからならできるかもしれないが、専門高校はそれを1からできるような気がします。

観光ビジネスもできることですし、観光とビジネスを繋げた力が身に着けられればよいと思います。そこで経験値を積んでもらって、自分の進路やこれからの生き方に繋げていってくれたらいいなと思っています。

前回、鈴鹿先生からもコーディネートをするなどといったお話が出ていましたが、専門高校は比較的時間が有り、材料もそろっているのも、もしかしたら高校生だからこそ、つなげる役割ができることもあるのではないかと、そういう能力を身に付けてもらえるのではないかと思います。

○日本大学・宍戸委員

前回、プロデュース能力や地域課題を解決する能力と出てきたのですが、北村先生のところは実際、高校を出てからの就職率はどのくらいですか。

○金沢商業高等学校・北村委員

6割です。

○日本大学・宍戸委員

結構多いですね。首都圏の商業高校と違って、地方の商業高校は、商業科の役割が強く、優秀な生徒さんも来ているので、その中で観光分野とそうでないところとか、多分銀行とか金融機関とか、できる生徒さんが好む安定している地域の有名企業に入っていくことを、高卒の方も望むと思うのですが、そういう時に、観光業界的な役割とか、観光教育の強みとか弱みとかどのように感じられていますか。

○金沢商業高等学校・北村委員

漠然とした感じにはなりますが、物おじせずに話せる子が多くて、何を尋ねても必ず答えが返ってくるような感じです。確かに、学力が高い子が目指すべきところは、県内でも名の知れたところに行きたがる反面、最近は、サービスとか販売系の仕事に進む子たちもいるような感じです。

特に、観光を学んでいるから人間力が高いというか、元々、色んな人と知りあう機会があるので、どこへ行っても物おじすることがなくて、一番印象的だったのは、一度、観光の子たち2名を沖縄に連れていったことがあったのですが、かなり成長している姿を見ることができました。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

資質のところをいうと、かなり育てたいと思っているものが多く育つのが観光教育ではないかと思っています。

具体的に当校で言うと、海外に行っているということで国際的な視野もそうですし、郷土を愛することや、人とたくさん会うためコミュニケーション能力も育ちます。

今、いろんなところにインタビューを行ったり、実際に専門高校が行う観光教育は、単なる交流をやっているわけではなく、ビジネスに絡めていったり、一緒にプロジェクトを行うことが多いので、そこで取材力、企画力、課題発見能力、課題解決能力が上がっていきます。海外に接した子たちは、当然、コミュニケーションを取りたいので言語学習への意欲が上がったり、アイデア発想能力が上がったりするので、かなり多岐の分野にわたって有効なことができるものになっていくかと思います。資質・能力として、何を育てたいかという整理はあるのですが、行っている側からすると、観光というのは、1つの素材として資質・能力が多く育つと思っています。

○日本大学・宍戸委員

高校の専門教育の中で、確かに商業高校の子たちは検定を取るなどもあって、一生懸命勉強して、人間としても実直で、しっかりしていて仕事もこなせると思います。

観光の子たちは、検定などはあまりないこともあるのですが、まさに現場に出て行って、絵に描いた餅ではなく、実際の社会で起こっている出来事を PBL で体験していくので、人間力も上がっていくし、課題や学びの要素に目を向けられるので、情報収集をしたり、コミュニケーションを取ったり、語学に関心を持ったり、好奇心にスイッチが入ることもありますので、そういう意味で、専門教育がリアルな社会と繋がって勉強しているところが専門学科だと思います。

ニセコ高校のお話を聞いて、地方にもかかわらず先進的な取り組みをしています。商業高校や専門学科はすごいことをたくさんやっていて、普通高校は学力が高いですが、専門学科がやっていることは時代を先取りしている感じがします。

○岩倉高等学校・大日方委員

自校の生徒の場合は基本的には、こういう仕事をしたいという思いが強くて学校に来るということが延長線上にあって、どんなことも前向きに取り組む生徒が多いです。一方、普通科もあるので、普通科と比べるとということはある程度よくないのですが、やはり温度差というか、物事に対する取り組みというのは、運輸科の子たちの方が圧倒的に高いです。普通科の授業も2時間持っているのですが、それは感じるどころです。

その中で、モチベーションが高い子たちは元々素養があるので、それをどう高めるかを考えることが必要です。また、できるだけリアルな場所、ホストタウン MTG もそうですが、生徒が普段、八芳園に行くことはまずないので、リアルな場所で、発表の場を作ることが必要なのではないかと思います。そこから、資質が高まっていくのではないかと思います。

問題提起というのは、ある程度、普通高校の生徒でも結構できます。先日、観光甲子園の決勝大会に出る学校の動画を見ていたら、東京の本郷高校が鎌倉の問題提起をしていたのですが、それはぴったりはまる内容でした。普通高校の生徒もそういう部分まではできる資質を持っています。ネットなど調べてある程度把握もできるので、それにプラスしてリアルな場、実際に現地について感じるなどが、やはり、資質・能力を高めていくことにつながっていく、その場を我々大人や観光庁と一緒に作っていくことが必要なのかなと思います。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

観光に対して、資質・能力というのは、本当にたくさんあると思っています。観光を生徒に教える立場になって、そういうものがたくさんあるので、逆に、観光の専門性は何だろうと感じていました。

子どもたちとも、研修や実証をやる中で、1つの作業だけでなく、いくつもの作業をこなせる力をつけさせてあげないといけないと感じています。例えば、販売の仕事についてきた子だと、販売や会計をやっていればいだけだけではなく、接客やディスプレイ力、人との関わり、従業員の関わり、海外の方になると、またその関わり方が違ってきて、違う方法でやらなければいけないとか、非常にマルチタスクな部分が求められてくると感じました。

また、人ができることは限られているので、できないことを誰かにやってくださいとか、一緒に協働するような力、お願いできる力も1つの資質・能力ではないかと感じていました。

特に、地方になればなるほど、1つの仕事だけではなく、パソコンを触ったり、POPを書いたり、ディスプレイをしたり、発注をしたり、たくさんの能力が求められる部分があるので、観光も、おもてなしの接客だけではなくて、色んなタスクを身に着けて、しっかりとプロデュースする力みたいところが非常に求められてくるのではないかと感じています。

○日本大学・宍戸委員

今のお話の中で2つ関心を持ちました。

私も観光教育に関わっている中で、観光は色んなことを学べる教育ですので、人間力が高まったり、官公庁の会議で、旅行会社の方たちに会うと、結論を言うと、大学にはあまり期待をしていないみたいな話があって、おそらくこの話題は我々だけではなくて、観光事業者も考えなくてはいけない問題で、そもそも自分たちの専門性は何か、旅行会社はまさにそれが問われていると思います。ただそのあたりは見えていない部分があって、確かに何でもできるけれど、果たして何がエッセンスなのかという話になると難しいかもしれないと、堂々巡りしてしまうようなところがあります。

一方、本当の観光の専門性は何だろうかというところ、コミュニケーション能力も1つだと思いますが、それは観光でなくても身に付くと思います。

また、プロデュースする力や色んなことを統合的にやったり、専門的にやったり、ある意味なんでも屋じゃないといけないところや、観光は学生専門の学問なので、異分野のものをつないでいく力が身に付いたり、そのあたりがすごく変わる気がします。

20年以上前にはなりますが、ニセコ高校に着任した時に、埼玉のような大きな高校から突然行くと、1クラスしかないところなので、何でもやらないといけないのですよね。1人で4役5役が必要で、最初のころはよく文句を言っていたのですが、そうすると用務員さんに怒られて、お前は使い物にならないと言われたこともありました。

スペシャリストという響きはいいのですが、全体を見て動かないと解決できないということが、現場に出て実感したようなことがあって、そういう意味では観光はリアルな現場を持っていて、そこで色々経験をして、最終的に、専門学科のいいところは、大体はアウトプットを求められますよね。普通高校ではそれは学力である場合が多くて、色んな発表の機会はあると思うのですが、大体どの分野でも専門高校が活動的で、最後、結論を出さないといけない、そこが社会とも近づいているような感じがします。

具体的な項目は、観光ビジネスの教科書とか、学習指導要領を見たらワードとしては上げられると思うのですが、高校生にとって、総合力の体験とか、課題解決の力とか、結論にしっかりと導いていく力とか、誰かとつながっていく力とか、そういうことが大きくて、そのあたりは、普通科の観光教育でもやっているのだとは思いますが、専門教育の場合は結果が出てこないといけないところが、専門の先生方も強い意識があるのかなと思います。

○観光庁・刀根

前回から、観光を学ぶスペシャリストは何だろうと考えていたのですが、普通科との違いに一番迷っています。普通科であれば、自分の関心のおもむくままに広げていき、好きなことを広げていくことが将来の力になるということが大きく意見としてあったのですが、専門学科は世の中全体を見て動くとか、社会人になった時にいかに活躍して、結論を導いていくのかというところ

が重要になってくるということを感じています。

例えば、創造性や好きなものを赴くままに研究するという視点というのは、専門学科では必要でしょうか。

○日本大学・宍戸委員

それは、必要がないと感じる部分があるということですか。

○観光庁・刀根

生徒の関心事をどんどん追及するということが、あまり意見として出てこないのでは、どうなのでしょう。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

当然必要というか、逆に言うと、生徒がわくわくする環境がない限り、そこは深まっていけないので、そこは普通科も専門学科も同じだと思います。ただ、その前提となる基礎的な部分で、知っておいてほしいことについて差があるのではないかと思います。当然、専門性があればあるほど、より、課題を見つける、課題を解決するという場に近づいていくことが多いのだらうと思います。

私がやっている観光教育は、基本的にわくわくが前提にあるので、わくわくが前提というのは、そこに生徒たちの関心や興味があるということが前提になってくるので、それは議論に出てこなくても、当たり前のことくらい感覚で私はいました。

○日本大学・宍戸委員

普通高校だと、自己で完結してもいいようなところがあって、皆さんに火がつけば、そこで普通科の先生は役割を終えるというか、夢を持ったり、視野が開けたり、想像力が身について、それを諮らなくてもいいというか、そこまで意識していないと思うのですね。

専門学科ではそれが当然で、楽しくなければ生徒が乗ってこないのでは、いかに生徒が楽しくやるかということを常に考えていますし、創造性を考えています。また、それを、行動に移すので、自分が想像力を持ってやったけど、ダメだったとなったら、そこで修正するとか、もしかすると、それを行動まで移して、結果的に修正するという大人の作業が入ってくるので、刀根さんがおっしゃったような、好きにやらせていないような、好きにいく前に、先生たちが終了させようみたいな動きもなくはないですね。結果を出すことが重要なので。

もしかすると、そのあたりが疑問に思われたあたりかなと思いました。

○観光庁・刀根

分かりました。もう1点、北村先生が最初におっしゃっていた、基本となる土台を作って、そこから外に出て内を見るというお話で、基本的な土台というものが、知識のようなベースなのか、精神的なものなのかをお伺いしたいです。

○金沢商業高等学校・北村委員

まず知識は絶対に外せないと思います。これだけ実践が大事だと言いながら、ある程度の知識

がないと色々な話や行動に移せないですし、生徒も不安なので、当校で言えば、まずは、国内旅行業務の国家試験と、ふるさと石川という本で知識をつけて、もう1つは、地域を知ることです。外に出て行ってガイドをしたりする基本的な活動面ですね。活動面と知識面の2つをしっかりと身につけた上で、色々なことをしていけば、もっと幅が広がるのではないかと思います。

○観光庁・刀根

先生の中には、例えばいきなり外に出して、経験から積みという授業スタイルの方もいらっしゃると思うのですが、専門高校の先生方は、割と知識から入って、その後外に出てもらう順序というのは変わらないものなのではないでしょうか。

○金沢商業高等学校・北村委員

どうでしょうか。うちは、知識からということが多いのですが、逆の先生もお見えになると思います。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

うちは両面です。知識から入る時もあるし、実から入って強制的に学ばせる、それは両方ともあると思います。徳商デパートのホームページはご覧になりましたか。

○観光庁・刀根

はい、拝見しました。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

あのページを作るにあたって、生徒が絵をイラストレーターで描いて、一部コーディングしたり、実際にホームページも作って、ポスターも動画も作りました。そのための、動画を撮る編集技術をたくさんの生徒が持っているかという、持っていないけど、撮りましょうというテーマを与えた段階で、強制的にそれができるようになっていくという事実があったりもします。

そこは、一概に、すべてを知識からではなく、テーマを与えて、やれるだろうというところで、やらせているのも事実です。

どちらかではなく、両面が大事で、単に放りっぱなしや、これやりたいねで終わるのではなくて、形として出せるところまで持っていくというのが実業高校だと思っています。社会に対して、何かしらのインパクトを与えることができますよということを、教えていく学校なのかなと思っています。

○観光庁・刀根

ありがとうございました。最終的なプログラムの参考にさせていただきたいと思います。

○日本大学・宍戸委員

最終的には、両方ないとダメだと思います。実践もできて、知識も持っている。その中で、座学みたいなイメージの知識学習があってから、外に出るということは、明確にカバーはしてなくて、体験からどんどん気づいてやっていくこともあると思います。

観光学科を出ていなくても、ホテルを起業する人もいて、自分の持っている知識でやりながら学んでいます。北村先生がおっしゃったように、最終的には知識や一般的な理論がなければ、それは実業としては成り立たないと思いますが、それを最初に集中的にやると効率的なので、まず、基本を学んでから外へ出るというイメージに受け止めています。

○MURC・平川

違うアプローチについて考えてみたのですが、今、各マスがあるのですが、もしこれを、子ども姿、子どもがどうなっているといいかなといったところを、もし絵で表示するとすると、その絵にはどういう要素が入っているといいでしょうか。

○日本大学・宍戸委員

絵というのは例えばどんなものでしょうか。

○MURC・平川

イラストですかね。あくまでもこのフレームの場合ですが、高校生年代の子たちで、観光教育流の課題解決の力の学びを通じて、その後、子どもたちがこういうことになっているよと、それが、態度なのか技能なのか知識なのか、色々側面はあると思うのですが、どういう状態になっているということをイラストに表すとおさまりがいいのか、それが、高校の普通科、専門学科での違いは何だろうということがあればと。文章、単語とは違う切り口で恐縮なのですが、何か先生方の感覚をつかみたいと思って質問しています。

○日本大学・宍戸委員

あまりよく分からないのですが、その中で、皆さんがどういうコメントをするのか、面白いと思うので、北村先生いかがですか。

○金沢商業高等学校・北村委員

専門教育の部分ですか。今の専門高校の子たちが、課題解決をして、どんな感じかということですかね。

まず、課題にぶつかって2パターンあると思います。課題を解決できたパターンとできないおパターンで顔が違って、できたパターンは自信に満ちあふれていて、電球のひらめき！みたいな感じがなんとなく想像できて、出来なかった子たちは、ちょっとしょぼんとしているのですが、次の行動として何を起こすか、何をすればいいか考えているような顔でどうでしょうか。

○MURC・平川

色々アイデアを広げていくのに、すごく重要な1つ目のご意見をいただいたと思います。ありがとうございます。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

非常に面白いアイデアだと思って聞いていました。小学校から高校までの流れのような形でよろしいでしょうか。

小学校の絵としては、私もスポーツをやってきましたが、ルールにとらわれず楽しむということで、冒険とか、何も無い近場の山に登るところから入のかなと思います。

中学校に入ると、ある程度のルールを守って、規則的に行ってみたり、小学校の時は決められたグループがなかったのだけど、中学校になると、ある程度決められたグループで動くようになり、高校生になると、地域の見方を変えて、自分の育った地域の課題は何だろうという形で、自分で企画するような、大人たちと協働するような絵がいいかなと思っています。

専門性から言うと、最終的に言うと、そういう昔からのワクワクを通して、いろんな人を楽しんでもらうとか、地域課題を解決して満足してもらうとか、そういうような形はどうでしょうか。

小学校の時から、決められたことをするのではなく、わくわくさせながら、広げていくような流れみたいなことがあればと思っています。

私、サッカーをやっていたのですが、サッカーも小学生のうち、ゴールデンエイジといって、楽しくルールに縛られないで、ボールを純粹に好きになるというような指導もしているので、それと照らし合わせて考えてみました。

○岩倉高等学校・大日方委員

画面共有したのですが、見えていますか。

これは、ある旅行番組の最後に、絵で旅行の工程を表現しているのですが、BSで毎週月曜日にやっている番組です。

今、これしか頭に浮かばなかったのですが、例えば、小中学生が旅行プランを考えて、絵で表現するというのは、この専門部会で討議する話じゃないかもしれないのですが、こういうものを、絵にしてもいいのではないかと思います。

例えば、美術の先生が、ちょっと絡んできたり、地域だと、社会や地理の先生などの巻き込みができるのかなと思いました。

○日本大学・宍戸委員

必要であれば、後ほどそのデータを平川さん等に共有いただければと思います。ありがとうございました。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

小学校からのつながりというところ来说うと、小学生時代から、地域の一員であるということを知らせて、そこが目的で、自分は地域の一員で、こんな地域で、こんな観光の地域の中で生きているのだということを知、まず認識する世代かと思っています。

中学校になると、地域と繋がっていく、何ができるかは分からないけれど、とりあえず、いる所とつながったり、外の世界とつながったりして、目が広がっていくようなイメージですね。

高校のいわゆる普通科と専門科の違いが何かという、多分、普通科は、課題を自由に発見できるみたいな感じですかね。専門科は、課題を発見した上で、解決に持っていくとする、できるかどうかは別として、解決に向かって実践するというのが専門科だと、そういうことをイメージさせるような絵があるといいかなと思います。

○日本大学・宍戸委員

ありがとうございました。小学校の頃は、やはり、地域の魅力とか周りに関心を持って、自分もそのメンバーなのだといデンティティーに気づく時で、中学校になると、その中の輪に入っていく感じで、高校生になると、この指とまれじゃないけれど、動き出すイメージですね。

普通高校の子たちは、ドアを開けて、世界に目を向けて、もっと上の学びにつながっていく、大学やビジネスや研究や専門学校など、その先に道が広がっていくのですが、専門教育の場合は、輪を作って道を広げて、新しい道を少しずつ作っていくようなイメージですね。その地域で、新しい道を切り開いていくような力がつければ、おそらくプロデュースする力に近づいていくかと思っています。

そういう意味では、小学校、中学校段階で、スパイラル状になっている図というか、スパイラルがいいかどうかは分かりませんが、分断する形は良くないかもしれないですね。

小中高の中で、スタイルを変えていくというか、さっきの大日方先生のパターンは、すごろくとはちょっと違うのですかね。すごろく方式というか、流れが切れない、つながっていくところが、自分を見つけたり、地域の良さに気づいていくというステージと、実際に活動に落とし込んでいき、ビジネスでどんどん活かしていくということが、専門学科の役割だという気がしています。ただ、いずれも、普通科の人たちも、大学を出たら就職をして、その中に入ってくると思うので、着地は一緒なのかもしれませんが…。

ありがとうございました。では、次の議論に入りたいと思います。

③観光教育の「普及方策」について

○日本大学・宍戸委員

高校の専門学科については、私自身の問題意識として、最後に話題があった、今後の施策のところ、どんなことができるかということで、来年以降、具体的にどんな活動をしていくのかとか、そういうイメージでいいですか。

○MURC・平川

そのイメージで問題ございません。

○日本大学・宍戸委員

どのような形で皆さん方が、観光庁の1つのきっかけを活かして、求められているかをお聞きしたいと思います。

○金沢商業高等学校・北村委員

これを私たちが伝えるとか、もしくは子どもたちに対してなのか、どちらでしょうか。

○日本大学・宍戸委員

この事業として、観光教育を普及していくために、特に専門学科として、こういうことをしていくべきだ、していただきたい、観光庁の施策としてどうかということだと思います。

好きなことを言うていただければと思いますが。

○金沢商業高等学校・北村委員

このことをしっかりと他の先生にも伝えるためには、一本の授業として成り立つような、どんな人でもできるようなテキストがあったら良いと思いました。ある程度自由な部分があって、導入の部分では、こういうことを身に着けていくというようなテキスト的なものと、大日向先生のお話にありましたが、自分のところの課題は、自分ではなかなか見えないところがあるので、他の高校、県外の高校、大学、企業など、そういうところと、行き来するパイプ的なプログラムがあると面白いと思っています。

高校の専門科間であれば、オンライン上であれば、少しやってみようと思ったらできるとか、人とつながるようなプログラムと、それを誰もが実行できるようなテキストみたいなものができたら良いのかと、それが、小中校とつながっていったら良いかと思いました。

○日本大学・宍戸委員

本当にそうですね。是非、そういったことも参考にさせていただければと思います。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

来年度以降というと、どういう生徒をどう育てたいということ、決めるのが先だと思うのですが、それを実現するモデル校的なものを作ってみて、モデルとして回すとどうなったか、こういうカリキュラムだと効果があるよね、ということが、何年かのプランで考えたら、その段階に入ってくるのかなと思います。

それと同時に、普及させていく必要があるのですが、大学の先生や、高校もあまり余力がない状態のところが多いのですが、そうは言いつつも、アドバイザー制度のような形で、コーディネートの他の学校ができるように、その先生が、何かアドバイスをしてあげて、同じカリキュラムでも、これを活用するといいか、こんな風にやるといいとか、宍戸先生を含め、他の先生方がアドバイスできるような仕組み作りができると、後々広げていくために、とても有効だと思います。

まだ、実際に何をやるか検討ができていませんし、今の状況では海外に行くのは難しいと思いますし、オンライン上で何かやりましょうという形になるのかもしれませんが、こういう観光プログラムをモデル校を使って実際にやってみてどうか、それが、やりたいけれどやることできない、まだ学びたいという先生方が、観光に関してはたくさんいると思うので、先生方が学べるような場であったり、コーディネーター的な人たちを活用して、そこがうまく成り立つような仕組みづくりみたいなことを、5年プランでいくのであれば、考え始めるタイミングではないかという気がしています。

それが、観光庁の中だけでできるかできないかは分かりませんが、考えてみたらいいのではないかと思います。

○日本大学・宍戸委員

今、先生がおっしゃった2つの点は、私も重要だと思います。

ただ、観光庁の事業があった時に、自治体を募集して選んで、半額補助して云々という話はよくあると思うのですが、高校の場合には、半分持ち出すことはなかなかできないので、金銭的な支援なのか、ネットワークや人的な支援なのか、持ち出しがない前提であれば、小中高それぞれで、モデル校のようなものを実証していくことはできると思います。去年、事例をビルドで紹介したりして、どういうところまで入り込めたのかはわからないのですが、いくつかの成功事例と

というか、モデル事例を示していくことは、学校側からすると、分かりやすいと思うので、良いご指摘だと思いました。

アドバイザー的なものという点に関しては、私も昔から言っていたのですが、影響力や力がなくて、今にいたります。やはり、観光教育をきちんと伝えられる、もしくはやろうとする学校からすると、分からないことがいっぱいあるので、そういったことをサポートできるもの、まちづくりアドバイザーとか、色々な制度がそれぞれの自治体にあるので、特に商業高校などでは、これから観光教育がビジネスで始まるので、少なくともそういったところをベースに、かつ、もっと広く小中高の観光教育を推進するためのサポートシステムについて、一定の有識者や経験者がいて、地域ごとにサポートできると良いというのは、仰る通りだと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

以前、宍戸先生に、自校の生徒が先生の学校にうかがって、授業をショートバージョンでやっていただいたことがありました。例えば、そういう機会をもっと設けたり、ZOOMで中継したりして、観光教育の一端を知ってもらい、見てもらう機会を作り、まずは学校の先生に見てもらって、そこからネットワークを広げていってはどうでしょうか。それは、高校生同士でもいいですし、我々教員でもいいので、ネットワークを広げていくことが必要だと思います。

当校は私立なので、生徒募集に力を入れる必要があります。いろいろな学校が集まって、学校のプレゼンをする機会が結構あり、特にZOOMを使うようになってから増えました。そういう形で、観光のハードルを低くして、興味、関心のある子に、どんどん入ってきてください、こういうことをやりますよということを、例えば観光庁さんが主催して、もっとハードルを低くして、色んな子たちが参加ができるようにする、それは、専門科と普通科が一緒にやるのも1つの手だと思います。

勝手な妄想ですが、そこに、観光庁長官や大臣が参加するなどして、大臣が来てくれているとなれば、注目度が高くなりますし、発信力も増えていくと思います。

色々なコンテンツを使いながら、観光教育を広げられるようなことができればと思いました。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

先ほど、全国の観光研の話もさせていただきましたが、長い歴史があるものですし、私も初めて観光を勉強するときに、この研究会から学ばせていただいたことがたくさんありましたので、この研究会を、どう持続可能なものにし、効果的なものにしていくかということが、まず1つの課題としてあると思います。

現在、文部科学省や観光庁が後援という形でやってはいると思うのですが、来年が伊能商業高等学校等に対し、どこまでサポートをしてあげられるかが、1つのポイントになってくると感じています。

観光サミットは、文科省後援ではないので、なかなか先生の出張ができない問題があります。このあたりをどこかで整理する必要があると思います。その時に、先生方のご意見、観光庁からのご意見やサポートをいただきながら、できるだけ、今あるものをしっかりと持続的に動かしていくことができる方法を考えます。

先ほど、チャットに、今年の加盟校からいただいた意見を挙げておいたので、参考にさせていただければと思います。

鈴鹿先生からモデル校の話がありました。以前、自校で環境に関してのモデル校を3年受けて、軌道に乗って、今、環境教育を継続的に実施している部分があります。その部分で、ある程度モデル校を作って、年間いくらかの支出をいただき、その中で観光教育を行う。旅費もなかなか学校で出ないため、どこか発表するようなところで集めていただいて、そこで情報交換をしたり、観光教育について学ぶような、そういう動きもあって良いのではと感じました。

○日本大学・宍戸委員

ありがとうございました。まさに、高校の研究会が立ち上がっていく中で、色んな課題があって、今いただいた資料を私も拝見したのですが、現実的には難しく、先生たちのご苦労もあります。個人会員というのは、自分の学校が観光教育をやっているイメージを校長が持っていないと、学校参加ができないので、やる気のある先生が参加しているという状況です。

ただ、大学の教員と違って、研究費があるわけではないので、大会には個人の自腹で来ているということが多いんですね。熱量を持っていらっしゃる方もいらっしゃるのですが、そういう状況で、高校の先生方は、なかなか難しいところもありますので、そのあたりのサポートが必要ですね。

今後の進め方としては、やはり、商業に観光ビジネスが導入されるということは、非常に大きなチャンスなので、これを絶対に逃さない施策を打っていただきたいと思います。

例えば、カリキュラムが出来たあと、それを観光庁として、具体的に地域と結んだプログラムにどう展開していけるのか、ただ、一方で、商業教育だけに限るという考え方は、前回の話にも出たように、辞めていただいた方がいいと思います。

これを基軸として育てながら、普通科、他の学科に展開していくやり方があると思っています。

あとは、観光の魅力を知っていただくことが、なかなか難しいのは、先生方が興味を持たれていても、管理職が分かっていないと、違う力学で動いてしまうので、学校の管理職に対してもアプローチできるように、観光庁でモデル事業のような形で、インセンティブを選べて、大きな商業高校や学校で、管理職を巻き込んで行っていくことが全国に広がれば、すそ野も広がっていくと思います。変わり者が減っているという状況を、変えていきたいと思います。

市民権を得るためにどうするか、後押しができないかと思っています。

オンラインが使えるようになってきたことで、全国の先生が一斉に集まって行うことができる、研修会、勉強会のようなものを、頻発にやるということも1つです。高校の先生は、まだZoomに距離感がある先生もたくさんいらっしゃるのですが、リアルな研修会をいくつかの地域で行うのもいいと思います。何でもZOOMでできるというのは企業的感觉で、意外と教育現場はまだなので、もう少し文科省が頑張ってくれるといいのですが、まだ、先生が簡単にZOOMを使ってやれるほどではありません。自宅に帰らないとできないとか、結構ハードルが高いので、なんでもZOOMにしないように気を付けていただきたいと思います。両方大事ですね。

最終的には、学校現場の先生方は、生徒がいかにかそこに入ってきてくれるか、どういう生徒を育てられるかが大事なので、観光甲子園なんかもありますが、中谷先生がおっしゃっていた、動画コンテストというのも、なかなか生徒たちと地域との関わりが見出し難かったりするので、地域や現場と生徒たちが活動して共有できる場も作っていくなど、色々な機会を観光庁として創出していき、学校と教育現場が、観光教育を魅力的なものとして受け止めて、広げていけるといいと思います。お伺いしました。最後に、一言ずつあればお願いします。

○金沢商業高等学校・北村委員

いい勉強になりました。次は第3回になると思いますが、主にどんなことを想像しておけばいいですか。

○日本大学・宍戸委員

今回は合同なので、それぞれの内容を平川さんにまとめていただいて、出てきたものと、座長会議もありますが、それでまとまったものをベースに最後皆さんから意見をいただくということになります。それぞれの立場もあって、難しいところはあるのですが、なんとかそれぞれの議論を1つの絵にするということが、目的だと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

先ほど、個人で参加する先生もいらっしゃるという話もありましたが、そういう先生方がもっと増えて、さらにそういうものに対しての、学校を支援してくれるような仕組みですね、観光庁からの依頼状が来ると、学校はいいよという話になります。協議会の案内がきて、行きたいといった場合にはなかなか難しく、やっと会費を払ってくれるようにはなったのですが、公務としては認めるけど、現地に行く費用は自分持ちになっていたりするので、他の学校もそういうところがまだたくさんあるのではないかと思います。

動きやすい、参加しやすいということで、ZOOM活用も1つの方策ではありますが、リアルの場で会って、そこから先生の学校を見させてくださいというコミュニケーションを取り、我々が学ぶことによって、観光って面白いな、他の先生は観光教育をこのようにやっているのだなど、そして生徒さんの雰囲気ですね、それを教員が知っていくことが観光教育を広げていくことにつながると思います。その支援を是非、観光庁さんにしていただいて、全体で盛り上げていくような形を作り、さらに、どう発信するか、色んなニュースソースにどれだけ載せて伝えていくかというところが、今後の課題かと思いました。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

多くの省庁で、来年度のことを始める時は、スピードが夏以降といったことが多いので、できるだけ春の段階から動ける状態にさせていただけるとありがたいです。

来年度は、まだモデル事業までいかないとは思いますが、モデル事例に行くときには、前年度の終わりぐらいには方向性が見える段階で、4月当初、学校でカリキュラムを作る段階で入れ込めるようなスケジューリングをしていただけると、よりよいものができると思います。

違う省庁とも事業をやっているのですが、秋ぐらいから来ると、非常に授業がひっ迫されて苦しい状況があるので、せっかくやるのであればいいものをやりたいので、観光庁側で、それをコントロールする人たちの方で、それをイメージしていただけるとありがたいです。

○北海道ニセコ高等学校・中谷委員

今日はありがとうございました。観光についてということで、先ほど宍戸先生からもお話があったと思いますが、経済の軸というか、観光立国という言葉もまだ知らない先生方がいる状況ですので、本当に経済の軸になっているということも含めて、観光教育の重要性について、色ん

なところで広めていくことができるように支援していただければと考えております。

今日は色々と勉強になりました。ありがとうございました。

○日本大学・宍戸委員

今、皆さんがおっしゃったことを軸に、来年も高校の研究会等がありますので、是非、来年は刀根さんにも来ていただきたいと思います。たまに、観光庁の方に来ていただけるのですが、本当は、文科省の方にも見て頂けるとありがたいと思います。

これを軸に、何か活動を展開されると、少しではありますがプラットフォームがあるので、活用していただくといいかと思っています。

全体を通して、何かありますか。

○MURC・平川

1点だけよろしいですか。今日、意義、目的についてご議論いただいて、今後作業を進めて行くにあたって、資質の方はまだゼロベースかと思っているのですが、意義・目的については、スライドを元に、微修正を加えていくようなやり方でもよろしいでしょうか。

○日本大学・宍戸委員

特に異論はないと思います。ただ、少しだけ出てきた現場での体験感とか、専門学学科的なイメージがちょっと抜けているところがいくつかあったので、そこは、先ほどのご意見を反映していただければと思います。全て入れ込むのは難しいと思いますので、大きく変更が必要だという認識は多分ないのではないかと思います。

○観光庁・刀根

今日は色々ご意見をいただきありがとうございました。スケジュール的な面を、気を付けていかなければいけないなと思っております。第2回協議会の日程なのですが、2月17日でよかったですでしょうか。

○MURC・平川

ご出席いただく方につきましては、2月17日になります。

○観光庁・刀根

時間はまた調整させていただきます。

○日本大学・宍戸委員

統括座長なのですが、専門学科に関わってきた立場として最後に一言だけ。初等科、中等科の場合は、理念的な部分が先行していくので、輪を全体に広げるというのも難しく、啓蒙活動になっていくと思うのですが、専門教育については、やるべき宿題が目の前にいっぱい広がっているので、そこだけやっていただきたいという意味ではなくて、是非ここは、来年度以降、何か具体的なアクションをおこしていただくような形であれば、また、先生方からご意見が出てくると思うので、それを是非お願いできたらと思っています。

○MURC・平川

次回、第3回の分科会で、今日いただいた資質・能力や、求められるプログラムの理想形を基に、普及方策を、教員、場づくり、ネットワーク、情報共有、いくつかの観点に整理させていただこうと思っています。

もし、手を動かしていただける方がいらっしゃれば、メールベースでお伺いさせていただければと思っています。第3回分科会は合同で行うため、お1人あたりの時間が少なくなってしまうと思うので、もし、ご協力いただける方がいらっしゃいましたら、事前にお返事いただければと思います。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

たたき台ができた段階で、一回いただければ、宍戸先生と日程調整は必要ですが、何人か有志を募って議論することもできると思います。先生方はタイミングが合えば、公式ではないところで行ってもいいと思っているので、早めにいつまでに作りますと言っていただければ、それ以降はこちらで集まれる人だけで行うことも可能です。

○MURC・平川

一旦、年明けに、座長の先生方に、特に資質・能力の部分について、たたき台を出させていたどうかと思っています。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

データが来るのが分かった段階で日程を考え、有志の先生方の中で、意見は出せると思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

先ほど、どのタイミングまでに決めておくかという話をしたのですが、例えば高校だと12月からシラバス作りを始めます。中学や小学校はどのタイミングでカリキュラムを作り始めるか、どのタイミングで決めるかを理解していないので、是非それぞれの部会で確認していただき、そこから年間のスケジュールがどのように立てられるか、ご確認をお願いします。

5. 事務連絡

○MURC・平川

第3回分科会は、1月19日（火）17:00~19:00で予定しています。開催場所は、当社本社の神谷町の会議室を予定していますが、ハイブリットになる可能性がありますので、年明けの状況を見ながら、ご連絡させていただきます。

以上